

## 都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー (5) ツァヤンジ

サラングレル

児玉香菜子

本テキストは中国フフノール(青海)省出身の小都市在住女性、ツァヤンジさん<sup>1</sup>のオーラルヒストリーである。筆者らはこれまで内蒙古自治区(以下、内モンゴル)在住で大都市に暮らす女性のオーラルヒストリーを公開してきた(サラングレル・児玉 2018 : 2019 : 2021 ; サラングレルほか 2020)。ツァヤンジさんの居住地はフフノール省海西モンゴル族チベット族自治州(以下、海西州)デルヒー<sup>2</sup>(徳令哈)市である。デルヒー市は海西州人民政府所在地で2020年現在人口約9万人<sup>3</sup>の小都市である。

ツァヤンジさんが都市への移住の契機となったのは教育と結婚である。早くから親元を離れ教育を受け、進学した党校<sup>4</sup>でそのまま職を得ている。その後、党校が解散されたのちに、田舎に戻り牧畜に従事していた。次に、都市に暮らすきっかけとなったのがデルヒー市に職を持つ夫との結婚である。本オーラルヒストリーはツァヤンジさんの穏やかで優しい人柄と人民公社期の生活を伝えてくれる。

はじめに

ツァヤンジさんは聞き取り者のサラングレルの姉である。サラングレルは姉の治療のために、前もってフフホト入りして、ツァヤンジさんをフフホトの白塔空港で出迎えた。

ツァヤンジさんは西寧市から飛行機で来て、フフホト白塔空港に降り、サラングレルが出迎えました。痩せて色白で、端正な白い歯をもち、美しいモンゴル人のお姉さんが笑顔で出てきました。恐ろしい重い病にかかり、1か月前に手術を受けたので、体は弱っていました。しかし、妹のサラングレルを見て、気持ちが高ぶって喜んでいたのは明らかでした。サラングレルは出迎えて、病院に送り届けて入院させました。病院では、主にナゴンビリグ医師<sup>5</sup>の講義を聞いていました。入院日の翌日から時間が空いているときに聞き取りしました。ツァヤンジさんはフフノール省海西州デルヒー市ゴビ・

---

<sup>1</sup> サラングレルが聞き取りを行い、モンゴル文字に書き起こし、それを児玉が日本語に翻訳した。

<sup>2</sup> 本テキストのモンゴル語表記はオイラート方言に準ずる。

<sup>3</sup> 柴達木日報、2021年7月9日第003版。

<sup>4</sup> 各級の幹部党员のための教育機関。

<sup>5</sup> 新型の心理治療法、モンゴル医身心インタラクティブ療法の創始者。健康教育と心理催眠技術を有機的に結合し、人の心理的エネルギーと生理的潜在エネルギーを刺激して病気の治療を試みるもの(李 2019)。

ソム<sup>6</sup>出身です。彼女は海西州党校を退職した普通の幹部です。ツァヤンジさんの家族は代々民間の芸術家で、民話、伝説を上手に語ります。彼女の母とその姉は歌を上手に歌い、英雄叙事詩や歴史物語を語るのが巧みで素晴らしい才能の家系の人たちでした。父は幼いころにラマだったため、チベット語とモンゴル語の読み書きができ、家具を修理する器用な人でした。父自身も民話や歴史物語が好きな人でした。サラングレルが聞き取りするとき、ツァヤンジさんはまだ 70 歳になっていませんでしたが、病気のために、足腰がかなり悪くなっていました。しかし、記憶は明晰で、涙もろく、優しい人です。夫のツェセンブも一緒だったので、聞き取りするときに、一緒に尋ね、話し、忘れていたことを思い出させ、足りないところを補い、聞き取りは楽しく進みました。

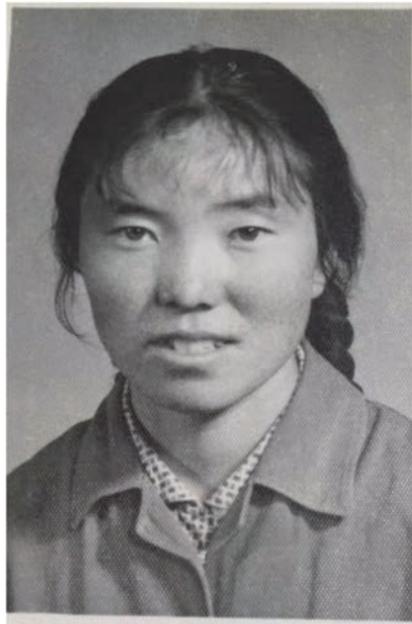


写真 ツァヤンジさん<sup>7</sup>

—あなたご自身の生まれについて、祖先の興味深い歴史や物語があれば、お話しいただけないでしょうか。祖父母の上の世代について何代まで数えることができますか。わたしにご自身の故郷、幼いころの珍しいこと、きょうだい親戚、仕事、子どもについてすべて話してくださいませんか。自由に話してください。あなたの口述史を書きとめたいと思っています。

はい、分かりました。わたしの口述史なんてありますか。わたしは上の世代の歴史についてよく知

---

<sup>6</sup> ソムはモンゴル語で、中国の行政単位の一つで、市の下に位する。中国の郷に相当する。

<sup>7</sup> 正確な写真撮影年は不明。1970 年代に撮影されたもので、30 代と思われる。

りません。分かっていることを話します。わたしは丑年で、1949年にフルログ旗<sup>8</sup>のゴビ・トホイというところに生まれたそうです。今年68歳です(2017年現在)。現在のフフノール省海西州デルヒー市ゴビ・ソムのフルログ・トスフンです。わたしの故郷にはフルログ湖とトスフン湖というつながった2つの美しい湖があります。むかし、その湖を賛美してフルログ旗と名付けたそうです。わたしの故郷のモンゴル人は偉大なる君主チンギス・ハーンの弟のハプト・ハサル<sup>9</sup>の末裔とその属民だったそうです。本来、フフノールの29の旗の中でフルログ旗というのはとても有名は旗でした。

わたしたちを今ホシュート・モンゴル人とも呼びます。デード・モンゴル人とも言います。デルブン・オイラトとも言います。わたしは歴史を知りません。数年前に、わたしの母方の親戚、氏族についての歴史を書きます、とわたしたちに尋ねていました。わたしの数人のきょうだいたちは文字が分かり、学がある方々です。わたしのすぐ下の弟のツォグソムは地方で有名な素晴らしい文士です。彼は先頭立って数人の親戚の目上の方々と一緒に祖先の歴史を書いているそうです。その歴史書はもうすぐ出版されるでしょう。そのなかに、わたしの祖先について「ウラン・オンブの7人の息子の末裔」と出ています。その7人の息子の一人の末裔が母方の祖父だそうです。わたしの母方の祖父の名前はソノムバルジョールでした。たくさんの経典をもつ居士だったそうです。また、たくさんの物語を語るとも賢い人だったと母はよく話していました。母もその父から覚えた物語をわたしたちが幼い時によく語ってくれたものでした。わたしは母方の祖父に会ったことはなく、ただ両親から聞いていただけです。母方の祖父ソノムバルジョールは兄弟2人で、兄は早くに亡くなったそうです。その兄の一人娘はマギダと言います。ヤヤ・メーレンというおじがいたそうです。わたしたちはよく知りません。わたしの母方の祖母はボリンツェナという名前だったそうです。祖母は5人の姉妹と兄1人だったそうです。祖母には2人の姉と2人の妹、兄が1人いました。祖母とは私が幼い時に会ったことがあるとはいえ、はっきり覚えていません。わたしのドンヤドというおじの家に住んでいました。一度母はわたしを連れて、訪問したことがあるとはいえ、幼かったので、どんな人だったのか覚えていません。いつ亡くなったのかも分かりません。わたしの母は8人きょうだいだったそうです。母には3人の兄と3人の弟と妹が1人いました。母の長兄の名はシルベ、次兄はリンチン、三兄は幼いときに亡くなっているので、名前を知りません。すぐ下の弟はドンヤド、その下の弟はナガン、一番下の弟はジンバと言います。妹はヤンチルと言います。

わたしの父方の親族はとても少ないです。祖父の名をわたしは知りません。早くに亡くなったようです。父方の祖母はよく知っています。おそらく1967年に亡くなったでしょう。祖母はわたしたち家族と一緒に暮らしていました。わたしたちを世話して育ててくれた恩のある祖母です。祖母の本名は分かりません。高齢だったので、故郷のんびりとや親戚たちは皆ねえさんを意味するイエイエと尊敬

---

<sup>8</sup> モンゴル族居住区での行政区の名、中国の県に相当する。

を込めて呼んでいました。父は2人兄弟で、祖母には2人の息子がいたそうです。父の兄はサムバと言いました。とても早くに亡くなりました。サムバおじさんの子どもたちとは関係がよいです。ゴムツァグ、ナルダ、ナランチメグと言います。父の名はワサムダンと言いました。当時、父は地元で少ない文字の分かる人の1人でしたので、バルガータの倉庫管理員、会計、貧民協会責任者などの職務をもっていました。チベット語の経典を読み、モンゴル語とチベット語の読み書きができました。地元の中国語方言もできました。わたしの故郷には大規模な農場があったので、大勢の漢人の農民がいました。父はかれら漢人農民とかれらの方言で話をし、ほとんど問題なく交流していました。

父はとても勤勉でした。父は子どもたちの見本のような人でした。とても穏やかな性格で、優しい人でした。両親が子どもたちをしかりつけるのをわたしは一生涯見たことがありません。いつも両親2人は寡黙で、おとなしく、謙虚で慎み深く、勤勉で、質素な人たちでした。わたしは7人きょうだいです。わたしは祖母と両親とで10人家族でした。60年代の苦しい時代に両親がわたしたちを育てるのにどれほど大変だったのかを考えると、心が痛みます。

わたしの母の名はダヒマーと言います。民話や英雄叙事詩をととても上手に話し、また、歌を上手に歌い、裁縫が得意な人でした。母はまた家畜の出産の世話がうまく、乳を上手に搾る模範牧畜民でした。バルガータ<sup>9</sup>の優秀な代表として県の政府の会議に出ていたものでした。わたしはきょうだいで上から2番目です。わたしの上に姉が1人いました。マンダルバーという名前でした。また歌がととても上手でした。不治の病にかかり、数年前に亡くなりました。実を言うと、姉が亡くなってからわたしはととてもつらく感じるようになりました。弟たちをととても気にかけるようになりました。わたしの上は姉一人だけだったので、気持ち的にとても頼っていたようです。人は老いるといつも考えることが多くなるものです。

わたしの夫はツェセンブと言います。1947年生まれで、亥年です。ブランギル旗出身です。わたしたち2人は結婚してから長く子どもができませんでした。そのため、1980年に夫の妹から娘を1人養子にしました。わたしが心から愛する一人娘です。ナランホワールという名前です。幼いときの名前はナナでした。わたしたちは皆ナナと可愛がって呼びます。生後1ヵ月で養子にし、牛乳と粉ミルクで育てました。わたしを「母」にしてくれた自分の一人娘をわたしは思う存分育てようと考えたものでした。成長の一步ごとにわたしたち2人は喜びあい、子孫がいる人が享受すべき幸せをすべて享受して楽しんできました。わたしの娘は今大きくなり、結婚し、順調です。婿はバヤルという名前です。とても良い婿です。今、わたしはこのように悪い病気にかかり、一人娘を苦しませるのを恐れ、とても心配しています。早く治るようにと祈っています。そのため、決意してこの内モンゴルの病院にやってきました。愛する一人娘のために心配しています。娘は簡単に泣いてしまう、とても優しい

---

<sup>9</sup> 生産（大）隊を指す。人民公社の基礎となった村の生産組織。

気持ちの持ち主です。わたしの体はここ数年でかなり悪くなりました。それで、足が痛くて仕方がないので、姉の息子のエンへはわたしを連れて医師に見せました。すると、子宮ガンかもしれないと、西寧市の大きい病院に行く必要があると医師と相談しました。それで、西寧市人民病院に行き、診てもらおうと、ガンというのは正しいですと言ひ、至急手術をする必要があるとそのままそこで手術しました。しかし、わたしは手術後、抗ガン治療を受けませんでした。ナゴンビリグ医師の講義が効くと聞いて、そのままフフホトに来ました。

—今回、治療にきて、病気は病気がよくなったのが分かりますか。どのような効果がありますか。

病気の状態はもとのままです。病室は少し冷えます。しかし、フフホトはとてもよいです。病院にいる人たちは皆モンゴル人です。どこでもモンゴル語で話しています。これはよいです。医師たちもほぼ皆モンゴル人です。一昨日、検査した結果がでたと夫が行ってきました。病院に来た時は鉄分とタンパク質は168でした。しかし、一昨日に調べた出た結果は197に変化したそうです。このように早く上がるはずがないのにどうなっているのかと夫は少し心配していました。わたしは医師に何度も尋ねました。わたしの担当だった中年の医師は少しも気にかけない様子で

「大丈夫です。その数値はいつも安定していません。数日後には下がりますよ。」

と言いましたので、少し安心しました。今、わたしは一人娘がとても恋しいので、3週間の病院の講義を聞き終えたら、退院して故郷に戻るつもりです。

わたしの体は幼いときから丈夫ではありませんでしたよ。幼いときに両膝が曲がり、一時期起き上がることができなくなりました。父は家の陽が当たるところに置いて、わたしを座らせ、両膝にヤギ皮で作った敷物をかぶせて、太陽に当てていました。あとでモンゴル薬を塗ってよくなりました。少したってから膝、足腰が、結婚後には胃痛で飲食がままなりません。いろいろな薬を飲みました。のちに、夫を連れてオラーン県に行き、2つの肩甲骨の下にある筋肉の上にある種の薬をつけた糸をおく治療をしました。また、モンゴル薬も飲みました。そして、飲食に気を付けているうちに少しずつ良くなりました。しかし、今も冷たいもの、変なものを食べると、胃が痛みます。わたしは幼いときから甘やかされて育ちました。わたしは父のお気に入りでした。わたしをよく「牛の目の娘よ」と可愛がっていました。わたしの目は大きいです。はっきりした目鼻立ちで、父のきょうだいに似ていると母がよく言っていました。わたしには姉が1人いたので、家事をそんなにしませんでした。学校に通い、就職し、結婚し、家を出ました。両親に恩返しできていません。しかし、わたしの姉は一番上ですから学校にも行っておらず、両親を助けて家畜を放牧し、弟妹たちを世話してきました。15歳という幼いときに結婚しました。姉はとても勤勉で、きれい好きな人でした。

—ご自身の学業と仕事について話していただけますか。

わたしは1959年か60年にゴビ・モンゴル小学校に入学し、勉強しました。当時、夏休みの時期に先生たちが家々をまわり、「学齢にたったこどもは学校に通わせよう」と宣伝していました。先生たちは家に来て、名前を登録していきます。当時、家は牧畜地域にあり、ウマに乗って1日かかるほど学校から遠くはなれていました。学校では子どもたちは寮に暮らすために、かなり大きくなってから学校に入学していました。年齢が小さいと、家が恋しくて、両親が恋しくて、子どもたちは泣いてよく勉強することができません。当時の小学校にルンドブという先生がいました。わたしたちに言語と文字、算数を教えていました。わたしは算数が得意でした。幼い時、算数が好きでした。1964年に学校を卒業したか、しないか分かりません。どちらにしろ、家に戻ってきて家畜を放牧するようになりました。

1964年9月に海西州の党校に入学し勉強しました。当時、党校はツァイダムにありました。当時、服、布団、食器などの生活道具と文具を学校が支給していました。そして、1967年に卒業するとき、数人の優秀な学生を学校に残し、職を与えました。わたしもまた残りました。わたしは学校に来て、1967年から1969年まで海西州の党校で会計の仕事を担当しました。1969年に国家政策と社会状況から党校が解散したので、わたしは地元に戻ってきました。当時、ちょうど20歳でした。家に戻ってきて、両親と家畜を放牧していました。のちに、1971年に獣医を学び、地元で3年間家畜を治療していました。1974年に夫と結婚し、デルヒー市で暮らすようになりました。新しい家はデルヒー市にありました。平屋の間だけの部屋でした。当時の結婚はとてもシンプルでした。夫は当時デルヒー市にある海西州の銀行で働いていました。当時、わたしは臨時の仕事をして、ほとんどは家にいました。1990年に海西州党校が再建され、わたしたちを呼び出し、名前を登録しました。そして、1991年に政策決定にもとづき、わたしの仕事を回復し、わたしに補うべき給料を補填して支払いました。わたしは仕事に復帰してまもなく退職しました。当時わたしはまだ42歳で若かったですが、一人娘が小学校に通っていたため、便利なようにと、早めに仕事を辞めて子どもをよく世話しようと思ったのです。

おわりに

2017年のある日、地元から電話がきて、ツァヤンジさんは突然危篤になり、亡くなったとの知らせを受けました。最後に聞き取りした時、「秋の涼しくなった時に来てください。そのときゆっくり話しましょう」と約束していました。残念なことに、おそろしいその病気は残酷にも重くなり、長生きしておかしくない、優しい性格のすばらしい女性との約束を守ることができませんでした。がんの闘病中にお亡くなりになりました。

聞き取り：サランゲレル

聞き取り日時：2016年12月18日午後。その後、一週間一緒に暮らし、毎日時間と体調を見なが

ら、何度も聞き取りを行った。2017年5月に西寧市で再度聞き取りした。

場所：国際蒙医院身心互動治療科（中国内モンゴル自治区フフホト市）

ホテル（フフノール省西寧市）

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 17K03274 の助成を受けました。ツァヤンジさんに心よりお礼を申し上げます。

## 引用文献

サランゲレル・児玉香菜子

(2018) 「都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー（1）ダリマ」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20：323-339.

(2019) 「都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー（2）ジンファー」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21：175-180.

(2021) 「都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー（4）オユングレル」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』22：77-87.

サランゲレル・児玉香菜子・白晓梅

(2020) 「都市在住モンゴル人女性のオーラルヒストリー（3）オユングレル」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』22: 375-387.

李同帰

(2019) 「身心互動療法 蒙医身心インタラクティブ療法の概要」『日本応用心理学会第86回大会プログラム』日本応用心理学会, 21.

（さらんげれる・中央民族大学中国少数民族语言文学学院／

こだま かなこ・千葉大学人文科学研究院）

## An oral history of urban Mongolian woman in China (5) Ms. Tseyanji

Sarengerile and Kanako

KODAMA

This text is an oral history of Ms. Tseyanzi, born in 1949, who lived in Delehei city, Haixi Mongolian Tibetan Autonomous Prefecture. Delehei city is the seat of the government of Haixi Prefecture, and is a small city with a population of approximately 90,000 as of 2020.

Education and marriage led to Ms. Tsyanzi's migration to Delehei city. She left her parents early in her life to pursue her education, and she got a job at the party school in the city in 1967. Later, after the party school was dissolved in 1969, she returned to the countryside and worked as a herder. Next, in 1974, she married her now-husband who had a job in Delehei city, and she moved to live in the city. This oral history tells us about the People's Communes' life and her peaceful nature.